

「アーモンドほか『危機、選択、変化』について」

Gabriel A. Almond, Scott C. Flanagan, Robert J. Mundt (eds). *Crisis, Choice, and Change: Historical Studies of Political Development*. Boston :Little Brown and Co.,1973,717p.

東京大学院総合文化研究科国際社会科学 博士課程
吉田 徹

“ 仮に政治体の形式理論を展開することに関連した問題の多くが、我々の手には負えないことが判明し、その解決は、次の世代のものだとして。そうしたところで、形式理論の点から我々の問題を熟考するならば、我々は個別科学として可能な種類と度合いの正確さへと向かうであろうし、無制限かつ無条件に天職に従う人々にだけ約束される気高さをもって科学という聖職につくことができるだろう ”¹

0. はじめに

本作品については、著者による詳細なプログラムの提示 (Almond 1969) とレビュー論文 (Almond et al. 1992) がすでに存在している²。本報告ではこれら 2 つの論文で提示されたポイントを抑えつつ、内容を紹介する。次いで、本作品の方法論上の問題点を 2 点指摘した上で、その意義を新制度論と比較して敷衍した形で論じ、小括する。

なお、原則として導入部および理論的枠組み (第一章および第二章)、結論部 (第十章) を中心として扱い、各国のケース・スタディ部分への言及は最低限に留めていることをご了承願いたい。

* * * * *

アーモンドの現役研究生生活の後半に位置し、3 年に渡る研究プロジェクトの成果であったにも係らず、この研究に対して「大きな反響 (Box Office) はなかった」(Almond et al. 1992:349)。

バリントン＝ムーア Jr. の言葉を借りれば、アーモンドの構造・機能主義は「出かけるつもりのない旅のために永遠に荷造りをしている」(cited in Peters 1998:115) わけだが、本書ではこの理論を基礎として、具体的な歴史発展史 (“taking historical cure”) を展開させたことになる。近年の比較政治学のアプローチは大まかにいって構造、文化、合理的選択論の 3 つに収斂されてきたとみることができようが、この全てを組み込んだ研究が 30 年以上も前に刊行されていたことは、やはりある意味驚くべきことだろう。

その後、アーモンドは、政治科学の「分裂」した状況を強く危惧を表明している (Almond 1990)。同書で、アーモンドは方法論上の「ハード/ソフト」、イデオロギー上の「レフト/ライト」の 4 項目に米政治学を分類し、それぞれの極端さを論難した上で、政治科学者の中庸性の重要性を説いている。従って、彼にとってのひとつのあり得べき政治科学のモデルがこの研究だったと位置付けることも、またできるだろう。

ところで、政治発展における「危機」の研究は、やはり同時期に公刊された Binder et al. *Crisis and Sequences in Political Development* (1971) でも焦点となっている。この本は、SSRC 「政治発展論シリーズ」の第 7 巻目として編集されたもので、国民国家形成時の危機解決のパターンによって発展経路が異なるとの問題意識のもと、ナショナル・アイデンティティ、正統性、参加、浸透 (penetration)、分配における「発展時の諸危機 (developmental crises)」を扱っている。そうした意味でもアーモンド等による研究の姉妹版であり、当時の研究課題が「危機」の構造的分析に集中していたことがみてとれる。もっとも、この Binder 等による研究は、“Development Syndrome” (Coleman) の解明を中心とし、近代化と発展、正統性と政体の関係などを問う規範的命題を中心に扱ったものであるから、異なる方向性もまた模索されていたことが解る。

* * * * *

¹ G.アーモンド、川原彰訳「比較政治のための機能的アプローチ」(アーモンド 1982年:168)

² 報告者が確認できた作品に対する最も詳細な書評論文は、Barry 1977 であるが、これはアーモンド等による連合理論の不適切性を、ライカー流の連合理論との乖離から批判したものであるため、本報告では直接的には扱わないものとする。

1. 理論枠組み部分を中心とした内容紹介

アーモンド等の研究は、自身の言葉を借りれば「全包括的理論 (all-inclusive theory)」³もしくはゼネラル・セオリー(“ we must able to establish that these four approaches are convertible...they are indeed parts of a general theory.” - p.35) を目指すものであるため、内容は非常に入り組んでおり、かつ用意周到なものである。以下では、単純化を恐れず可能なかぎり彼等の理論枠組みを要約することを試みる。

同研究の大枠は、structural-functionalism/system theoryを始点と終点(フェイズ、フェイズ)に据えつつ、これの間を分断する「危機」の諸要素とこれに対する諸アクターの対応を、social-mobilization theory (フェイズ)、rational choice/coalition theoryとleadership theory (フェイズ)の3つのアプローチによって説明することにある (p.49 Figure -2 参照)⁴。

(図)

(マクロ) 構造機能主義 - 社会変動論 - 連合理論 - リーダーシップ理論 (ミクロ)

フェイズ (preexistent system) とフェイズ (resultant system) は、イーストン流の構造機能主義によって説明され得る“通常”の政体である。この2つのフェイズの静態的な比較は、危機時に何が生じ、いかなる変化がもたらされたのかの説明を可能にする。これは、1) 社会経済構造、2) 国際環境、3) 政治文化、4) 政治集団、5) 政府構造と統治パフォーマンス、6) 統治連合とリーダーシップスタイルの6つの特徴によって、把握される。ちなみに、この“通常”事態は、政治的要求の構造と、政治構造によって配分される財や価値との間がシンクロしているかどうかによって区分される (pp.47-48.)⁵。平時ではシンクロしているこの2つ変数がデイス=シンクロすることが危機の必要条件とされるのである。

フェイズ (environmental change) は、危機の開始に位置付けられるものである。これは、政治システムの外的条件 (これは国際環境でも内政状況でもあり得る) によってもたらされる。同フェイズの分析で用いられるのは、K.ドイチュやD.ラーナーの知見を利用した社会動員論である。ここでは、外的条件によってどのように社会構造とアクターの政治的資源が変化するのが考察対象となる。これらが変化することによって、配分と参加の要求に対するシステムの反応キャパシティーそのものが変わってくるのである。このフェイズでは、主としてマクロとミクロの関係性 (linkage) の変化に焦点が当てられる。つまり、ここでの独立変数は経済的発展や社会変化、国際環境の変化であり、従属変数は、政治イシューの変化と顕在度 (saliency) である。両者の関係性の変化は、1) 民衆の相対的剥奪感と期待感の上昇、2) 文化的、および基本的な文化的価値観の変化、3) 政治的クリーヴィッジの変容、4) 政治的動員と自発的結社への参加度の上昇、5) こうした環境変化に対する政府のパフォーマンスと反応、を通じて計られる。特にケース・スタディの部分では、都市化、工業化や交通手段能力や社会的階層の変動や教育水準などが指数として用いられている。

フェイズ (linked changes) は、「システム危機」⁶が生じる局面であり、理論的な核心部分であるといってもいいだろう。ここでは、政治構造そのものの変動が生じる局面である。分析はより深度を下げ、ミクロな個々のアクターに焦点が当てられ、これらの間の選好や資源に基づく戦略が検討される。ここで採用されるアプローチは、合理的選択論に基づく連合理論およびリーダーシップ論である⁷。

³ アーモンドによれば、このプロジェクトは、決定論 (Determinacy) 安定論 (Stability) = システム機能理論、選択論 (Choice) 安定論 = 合理的選択論・連合理論、決定論 発展論 (Developmental) = 社会変動論、選択論 発展論 = リーダーシップ理論の4アプローチを統合するものである (p.20.)

⁴ ちなみにAlmond 1969では、第4フェイズとして「発展的リンケージ (Developmental Linkages)」(構造的文化的統治能力の変化)が挿入されており、計第5フェイズまで存在している。

⁵ もっとも、第三共和制やワイマール共和国のように、必ずしも危機後の体制がシンクロに帰結しない事例も観察された (p.25.)

⁶ 「システム危機 systemic crisis」は「現存の“constitution”が脅威にさらされる時」と定義される (p.48.)

⁷ フラナガンの言葉によれば、政治 = 可能性の術、のうち「可能性」を連合理論が、「術」をリーダーシッ

政治構造が変化するために、アクターの政治資源も変化し、その結果、統治連合の組替えが起こる。ここで、統治連合の組替えがスムーズに変更されればシステムは維持されることになるが、多くの場合体制変化につながる。

連合理論は、著者等がめたように、「分析の最も革新的かつ困難な部分」(Almond et al.1992:357) である。当時まだ導入されたばかりのゲーム理論 (cf.Riker 1968) を応用した上でこの連合理論は、アクターおよびアクター間の 1) 選好、2) 政治的資源の変化と配分、3) イシューに応じた距離、4) イシューの顕在性、を加味した現在のポートフォリオアロケーション・モデルを彷彿とさせる、極めて複雑なものである⁸ (なおここでの資源とは既存の議会制度外 職位、影響力、強制力 に存在するものとの前提がある)

各アクターの政治的資源は、それぞれに応じたアリーナに位置する。この資源が占めるシェアは各フェイズに応じて増減し、さらに、このアリーナの資源は各アクターに配分されている (p.78;p.79. の図参照)。いふなれば、状態が安定している状況において、各アクターが保持する政治的資源の総和は、ある特定フェイズでの政治的資源の分配状況とイコールになる。ところが、危機時においては、アクターが保持する資源のシェアが変化するために、アリーナに存在する資源配分そのものが変化し、結果的に統治連合のパターンに影響を与えるのである。

ケース・スタディ部分において、以上の指標を研究者は特定・数量化した上で、クロス・イシュー含め、計量される⁹。そこから導き出された結果から、勝利連合の方程式が特定される。この勝利連合はさらに、1) 連合構成員の価値効用 (utility value)、2) 統治潜在力 (ruling potential) のクライテリアによって、絞り込まれた上で、現存した統治連合と突き合わせられる。

もうひとつの柱は属人的なリーダーシップ = 文化・パーソナリティの変数である (p.98-99)。アーモンド自身、「リーダーシップ・アプローチは政治発展論に対する最も最近の異議申し立て者」と述べているから、いかに彼等の研究が意欲的なものであるかがみてとれる。

本研究でリーダーシップとは「政治的革新を説明可能にする劇的な個人の能力」(p.18.)とされ、連合理論に基づいて抽出された幾つかのセット間から、なぜ特定の連合が選択されたのかを説明する変数となる。但し、「発展論的リーダーシップ論を展開するものではない」(p.100.)ため、リーダーシップはむしろ連合理論の補完的な役割を果たすものとなっている。

フェイズ は、フェイズ と同様に、社会経済構造、国際環境や政治文化といったカテゴリーによって分析される。既述のように、始点と終点を同じ枠組みで分析することによって、何がどのように、どの程度変化したかを観察することが可能となるのである。

* * * * *

フェイズ で特に着目したいのは、「カレンシー」の概念である (p.72-74.)。フラナガンは詳しい説明をしていないが、これは危機時における政治権力が追い求める、しかし可変的な資源を意味している。政治アリーナにおける権力ゲームによって規定される「価値」と言い換えることもできるだろう。さらに、プレイヤー間で流通するこの「カレンシー」は、ゲームのルールによってその「両替のレート (conversion value)」が決められる。カレンシーが何であるか、基準となるカレンシーがどう転移するのか、そのレートがどの程度のものであるかによっても、連合のあり方が決定される要因となる。例えば、在位連合 (reigning coalition) が危機時において存続しにくいのは、これが変動せんとするカレンシーの安定性にもっぱら依存するためであり、さらにカレンシーのレートを変化させるだけのパワーを持たないためである。

ブが担うことになる (p.99)

⁸ アーモンド等は、ゲーム理論における政治資源の不変性や過小勝利連合の存在、アクターが相互交換可能でありイデオロギー的な考慮が欠けているために、改良を加えたとしている (Almond et al. 1992:359)

⁹ 計量の方法についてはAppendix A (p.651-) を参照。

以上のフラナガンによる理論枠組みは、複雑で周到な入れ子構造になっており、特にフェイズでの構造は「ロココ調」(Barry 1977)の呈をなしているが、論旨は一貫している。

- 1) アクターは危機に際して、危機の収束を可能にさせることができる連合を組むことを目標とする。
- 2) この連合の形成と結果は、アクターの選好、政治的リソース、統治ポテンシャルに依存する。
- 3) 中でも、政治的リソースは、アクターの制度内での位置、影響力、保持している手段から構成される。
- 4) 連合は、またアクターのイデオロギー的・イシューポジションによっても決定される。

以上が、*Crisis, Choice, and Change*の理論枠組み部分のラフスケッチとその特徴である。最盛を極めた構造機能主義(そしてこれを構成する諸要素)はもちろん、社会動員・発展論、リーダーシップ論、ゲーム理論をベースにした連合理論を総動員して、体制変化を扱うという、まさに「ドリームチーム」的な研究であることがみてとれる。実証部分ではこれらが、具体的な歴史的論述の中で展開されるのであるから、精密かつ完成度の高い研究であることは確かである。

2. 方法論上の諸疑問

無論、枠組みが全てにおいて成功しているとはいえない。例えば、レジームの差異(議会制民主主義、権威主義体制、革命政権等)が十分に考慮されないことによって、アクターが負担するコストは大きく異なることは先見的に予見されることであり、従って、連合形成のパターンに大きく影響を与えるはずである。しかし、体制間の差異によるアウトカムの変化等は計られていない。

報告者は決してパーシモニーの原則を擁護する立場ではないが、それでも様々な問題が指摘できよう。例えば、フェイズのアプローチである連合理論とリーダーシップ理論は、極めて存在論的な問題である、合理性と非合理性との組み合わせである。この場合、「ラシヨナリティ(=連合理論)」によって抽出されない解は、「イラシヨナリティ(=リーダーシップ理論)」によって補完されるようプログラミングされていることになる(その逆もまた成り立つ)¹⁰。主意主義か構造かの問題を永遠に繰り返す必要はないが、この両者を組み合わせれば解決するというものでもない。

以下では、アプローチ上のよりミクロな点に着目して、その問題点を2点挙げてみたい。

A. 分析レベルの移動と変数の入れ替わり

まず挙げられるのは、分析レベルの変化とアプローチの取り替えであろう。つまり、フェイズ、それぞれで、「異なるテーブル」(Almond 1992:)を用意することで、理論的一貫性が犠牲になっているのである。分析レベルを変化させることは、異なるものを説明する可能性をもたらす。

分析対象が変わることによって、ツールを変更するのは戦略的な手法としては理解できるが、同一の対象に対して、複数のツールを用意することは、結局のところ記述的推論と大差なく、そうした意味では複雑な理論枠組みを用意した意義はなくなってしまう。

アプローチの複数性はさらなる問題を生じさせることになる。主にシンクロ-ディスシンクロを基準として区分されるフェイズ間でアプローチを取り替えることによって、危機と構造の連続性の認知を困難にしていることである。つまり、アプローチの変更とフェイズの移動が同義的に扱われるために、歴史の特定時期の把握が困難になるのである。この点を例えば、V.Rittbergerのワイマール共和国

¹⁰ 「連合理論が選択を生み出し、リーダーシップと選択理論が決定を示してくれる」(p.630.) 特にメキシコの事例(Chapter7)がこれに当てはまるだろう。

生成のケース・スタディを例に説明してみる¹¹。

同論文では、フェイズ は 1917 年 7 月の域内平和 (Burgfrieden) の崩壊から ドイツ革命を挟んで 1920 年のワイマール議会選挙までに設定されている (pp.323-326.)。ここで連合理論が展開され、「反動的」コアリション (官僚機構、軍隊、DNVP、DVP)、「ラディカル」コアリション (独立社会主義者)、「ロイヤリスト」コアリション (中道政党と体制擁護派エリート) のうち、最終的に第三の選択が残存することが実証されている。

しかし、1920 年以降は、フェイズ に以降されることから構造機能主義的アプローチのみに限定されることになる。このため、1920 年以降のワイマールの「適応期」はどのような理由によるものが解らなくなるのである。換言すれば、1920 年を境として、分析ツールが、何の明示的な理由の提示なく変更されるために、ワイマール体制の安定は果たして政党やアクターの政治的リソースやイデオロギイ的距離が変化した結果なのかどうかは知ることができない。理論的枠組みからは、政治構造と価値配分の「再シンクロ」がフェイズ の開始となるが、Rittberger の記述は 1920 年以降がシンクロ期にあるとは明記していない¹²。なぜ 1920 年で、23 年や 24 年であってはいけないのかが、理論的枠組みからはみえてこないのである。

同様に、フェイズによる極端なツールの変更は、変数が何に効いているのかを理解しにくくする。再度、戦間期ドイツのケースを例にいうならば、フェイズ での扱われる独立変数は国際システムの中でのドイツの地位や国際的圧力である (pp.305-306.)。しかし、フェイズ に突入した途端に、これらの変数は危機を深刻化させる「アクセレーター」= 従属変数でしかなくなってしまうのである (1919 年にヴェルサイユ条約が締結されたことを想起されたい - これがアクターの政治的リソースに影響を与えなかったとは考えにくい)¹³。

B. 意思決定アリーナの位置付けと分析上の困難

もうひとつ指摘したいのは、「意思決定のアリーナ (Decision-Making Arenas)」とその位置付けについて、である。「意思決定のアリーナ」は、まず環境と統治能力によって制約を受けるものであり、さらに「選択」を下す際の前提や、またアクターの資源やイシューの顕在性によって構成される複雑な力学の場として捉えられる (p.66-67.)。

このアリーナは、先に挙げたようにアクターの政治的資源がどこで保持されているか、に関わってくるという (p.75-77) 。つまり、政府は政府内に、反体制派は例えば大衆動員に意思決定をセッティングするよう目指す。

問題は、この意思決定アリーナそのものが、アクターの資源によって機械的に構成されるよう処理されている点にある。資源によって構成されるアリーナ 代表に基づく職位、非代表的職位、影響力、強制力の 4 つ それぞれの関係性や、資源の種類によって得られる権力の強度や希少性は考慮されることがない¹⁴。こうした資源の特徴を加味しないことで、確かに政治的資源を計量的な比較考量を可能にする一方で、実際のアクターたちが、自らが保持する資源と、敵対的アクターのそれとを比べて行動を決定する、というようなレヴェルまでは考慮されることがなくなってしまう。この時点で、アクターの主観的認識は排除の対象となる。フラナガンのモデルでは、政治的資源とは「特定時点での有効性 (effectiveness) とその利用 (utilization) の程度」としか定義されない (p.76.)。資源は、計量化する上で認知可能なレヴェルに表出されて、初めて資源としての機能を担わせることができるのである¹⁵。

¹¹ この点は Dorby 1986 に負っている。

¹² 「続く 1923 年までの国内的・国際的ヴォラティリティ、そしていわゆる 1930 年までの安定期まで他のコアリション配置が浮かんで消えていった」(p.365.)

¹³ 「フェイズ の分析での従属変数がフェイズ での独立変数となる」(p.67.)

¹⁴ この点もっとも特徴的と思われる強制力は、原則的に抑止力としての機能しか果たさないと限定されている (p.76.)

¹⁵ もちろん、アクターの認識までを含ませるような負荷を連合理論にかけることは無理となるだろう。

平たく言えば、意思決定のアリーナの自律性をアプリアリかつ不動なものとしに転化させてしまうために、アリーナ内外で展開されるであろう権力作動の契機や重層性を見逃す可能性があるのである。例えば、ドイツのケースをみるならば、1919年の軍による退役軍人隊（Free Corps）の結成（資源としての強制力）と指揮系統を外れての行動などは、アリーナ内部での社会的状況によって可能になるものであるとしか思えないが、こうした環境変数はエピソードのひとつとして処理されるだけで、分析に組み入れることができてない（p.352-353.）。

この問題は、彼等自身の理論枠組み自体の問題というよりは、意思決定のプロセスとロジックを導く多数の変数と要素を、最大限に取り込んだ上で計量的に推し量ろうとしたために生じた問題といえそうである。

繰り返しになるが、報告者は、アーモンド等による Empirical-driven な研究プロジェクトを否定するものではない。これに伴う理論と方法論上の困難を指摘したのみである。

3. 新制度論との比較検討

しかし、新制度論を比較するとき、この困難は大きく際立つ。

アーモンド等は、1992年のレビューで、オレン(Karren Orren)とスクロウネック(Stephan Skowronek)等の「イエール制度学派」のペーパーを引いて、*Crisis, Choice and Change*の先見性を自賛している(Almond et al. 1992:342)。確かに、同書で用いられているEquilibriumやSequence、Historic Path、focal pointといった概念というより用語は、現在の新制度論での議論のポイントを先取りするような概念である。しかし、オレン/スクロウネックの議論で強調されているのは、諸制度の、歴史に見出される多層性であった(Karren and Skowronek 1995)¹⁶。

制度とは紛争と諸ルールの交差であり、これらがしばしば歴史に起因するという主張は、どのようにして“混淆(mixes)”が生じ、特定の制度における本質が何であるかを特定し、説明する際に適切なものである(pp.307-308)

つまり、彼等が見出す制度とは、政治制度の過去の異なる時点での生成と制度化であり、すなわち制度起源の非同時性である。

実際「最も重要な問題は、どのように時間を記述するか」(Ibid.:316)である。理論の設定=変数の入れ替わりによって時間の流れは変わりうると考えるならば、制度に表出する時間性/歴史性は特定化することができないのではないだろうか。さらにいえば、歴史的新制度論での説明の力点が、制度の「持続性」や「粘着性」「歴史的遺産」=経路依存性に徐々に置かれるようになったのに対して(cf. Pierson and Skocpol 2002)、アーモンド等の研究の関心は「危機」そのもののへの短期的関心に集中した完結型(“スナップショット”)であり、この点では齟齬をみせている。

むしろ、アーモンド等の研究は、フェイズの重点からしても、新制度論の中でもBatesやGreifを始めとしたゲーム理論的視点からアクターの行動を導いて均衡を説明するAnalytic Narrativesの流れ(cf. Bates et al. 2000)と親和性があるように思える¹⁷。

シャルプフによれば、社会科学はもはや一般的な「科学的法則」を導き出し得るほどのポテンシャルはなく、従って提示できるのは、「枠組み、部分的な諸理論、部分的説明」のみである(Scharpf 1997:29f.)。この場合、分析の起点となるのは「中小規模のメカニズム」を説明することのできる「モジュール(modules)」が織り成すゲーム(理論)である。彼の説明によれば、政府-労組関係による各国比較は同時に、政府モジュール、労組モジュール(労組-労組モジュール、自発的結社モジュール)政府-中銀モジュールなどから構成されるものでなければならない。モジュールの制度的配置と相互作用はゲーム理論によって説くことができる。しかし各モジュール間の関係性を把握するのが必

¹⁶ アーモンドが言及しているのは、Karren/Skowronekの1991年のAPSA年次大会でのペーパー(‘Beyond Iconography of Order:Notes for a New Institutionalism’, unpublished paper presented at the Annual Meeting of APSA)である。ここで引用しているのは彼等の1995年の論文であり、全くの同一のものではないことを断っておく。

¹⁷ 厳密に言えば、ゲーム理論と合理的選択論の差異は残るが、ここでは同類型のものとして扱う。

要な場合は、それぞれの文脈に埋め込まれているために、記述に依存しなければならないのである (ibid:32)。

ピアソンは、歴史的新制度論にゲーム理論を導入する困難として、シャルプフに従って、以下を指摘している。プレイヤーのペイオフや選好の前提を問わない、Composite Actorsのみを中心にして Quasi-Groupsが含まれにくい、簡潔性を優先させて、プレイヤーとオプションを制限させる、歴史のプロセスのシーケンスを抽出できない、以上の4点である (Pierson 2000:89-90)。この判断は、部分的にはフラナガンのモデルにも当てはまるといえる¹⁸。ゲーム理論上でのアクターは、ルールを共有していて初めてゲームを展開することができる。システム危機時においてそのような共約が全般的にあり得たのかどうか、という疑問はさておくとしても、アクターの「限定合理性」(サイモン 1987年)を仮定すれば、Appendix Aで展開されるだけの合理的計算が実際に検討されたかどうか疑問が当然残る¹⁹。

* * * * *

もっとも、ピアソン論文のもうひとつの力点である制度の「経路依存」、「ポジティブ・フィードバック」、「自己強化」や「再生産」といった時間概念を除けば、問題設定を先取りしていることは傾注に値する。

このように、新制度論へのインプリケーションを求めるとすれば、シーケンスの開始となる歴史的分岐点 = Critical Juncture の特定化と分析を理論的配置のもとに可能にしたことが挙げられる。例えば、コリア = コリアは歴史的分岐点を、もっぱら歴史的遺産や政治的亀裂の残存といった側面から特定化しており (Collier and Collier 1991:29-31)、包括的なプログラムを提示したとは言いがたい。歴史的新制度論に分類される研究で、分岐点が叙述されることはあっても、その内実を理論化/プログラム化する方法を提示したものは少ないように思われる。これに対して本研究は、「危機」をプロセス、環境、選択の各フェイズに分節、促進させる要因を特定することで、より実態的な把握を可能にし、例えば、非同調化や危機の「同時性」「蓄積性」といった概念を用いることによって、定義の曖昧さを回避することに成功している。大概の場合において Backward-Looking な分岐点の特定を、predictableなものへと転化することに成功している。そうした意味では、アーモンド等の、特にフェイズにおける分析手法は貴重である。

さらに指摘するとすれば、歴史の循環的説明を可能にしている点がある。新制度論はしばしば単線論的記述 = 歴史的事件の一回性/固有性を強調するのに対し、本研究の枠組みに沿えば循環論的分析と説明が可能となる (phase 1 phase2/3 phase 4 phase 1...) ²⁰。

4. おわりに “*La Rage de Conclure*”?

著者はレビューで、Phase の、特にコアリションの分析上の問題点を告白している (Almond; Falanagan; Mundt 1992:361-363)。まず、研究者に対してあまりにも多くの負荷をかけること (アクター、イシュー、フェイズによる方程式) イシュー間距離の計量の問題、そしてフォーマルモデルと歴史的ケース・スタディ双方ともに満足させられない可能性の3つである。

中でもこの3つ目の問題は「ナラティブかフォーマルモデルか (付随的に構造 = エージェント問題) (cf. Laitin 2002) か」という現代政治学の極めてCriticalな点を指摘するものである。この両者を臨界点までに「組み合わせ」ようとした同研究にでさえ困難が生じるということは、この問題を考える上で

¹⁸ しかしピアソンは、ゲーム理論ないし合理的選択論は、それなりの弱点を持つものの、制度プロセスの中の「モジュール」としての機能を果たすことで、有効なアプローチとなりうると考えている。

¹⁹ サイモンはアクター (彼の事例では経営者) は、考慮される判断のうち納得した時点で更なる選択肢を考慮することを止めるとする (「満足基準」)。

²⁰ クローズド・サーキットであるがゆえにこのモデルには「継続性がある」(p.46.)

示唆に富むように報告者には思われる²¹。アーモンドは90年代に入って、ライカーやダウンズの狭義の合理的選択論は、社会的背景から分離して「政治の現実性」を反映していない、と批判している(Almond 1990:ch.4)。ここで彼は自らの研究を引きつつ、ミクロ・レベルでの政治をみるとしても、効用と資源だけからアクターの行動を推測することはできず、「強力な意志、洞察と想像力、タイミングの良識」によって変化することから、連合理論を単なる「便利なデヴァイス」でしかないとしている(Almond 1990:132)。

アーモンド等は、「ハード=定量的」モデルの完成度を増せば増すほど、それを理解することが難しくなるばかりか、当時の意思決定者が処理し得た情報以上のことを負荷させるために、これ以上のフォーマルモデルの策定には後ろ向きな態度を示している(predictive modelに対するexplanatory modelの優位)。それでもなお、歴史のための理論なのか理論のための歴史なのかの志向性を明確にすべきである²²。もちろん、これがこの研究の弱みであり、強みである。だからこそ、結論部で連合理論によってパリントン=ムーアを、実際の歴史的経過からイーストンを批判することが可能となっている²³。

「ケース・スタディによって目指されたものは説明(explanation)と予測(prediction)と配置(control)」(p.647.)の全てである。しかし「限りなく豊かな現象のうち限りある一部分だけが意義をもつという前提に立って初めて、何らかの個別的な現象を認識しようという考えが一般的に論理的に意味を持つ」(ウェーバー1994年:78-79)のであれば、このアーモンド等の研究の「一部分」はもはや「部分」とはいえない程度にマクロである。すなわち、「理論的立場を混合(blending)することは、区別を抹消させて理論的利得をもたらさない可能性」があるのであり(Zuckerman 1997:305)、まず説明基準(standards)への厳格な帰依があって初めて理論は進化し得る、という原則が捨象されてしまっている点が最大の問題点だと指摘できるだろう。理論的統合は、理論間対話を失わせる契機にもなりうる。目指されるべきは、包括的理論の構築ではなく、理論間対話への志向と対話のための辞書の作成だろう(cf. Jupille et al.2003;網谷 2003)。この点、アーモンドの志向は、科学的であるには意欲的に過ぎたし、歴史的であるには科学的に過ぎた。

本研究と同じように、最後にハーシュマンを引用するならば、彼は1970年の時点で、パラダイム志向的("law-makers, model-builders and paradigm-molders")とストーリー志向的な2つの対照的なラ米研究を取上げた上で²⁴、後者の利点を雄弁に語っている(Hirshman 1970)。曰く、パラダイム志向は「理論を導くことの強迫観念(la rage de conclure)」(フロベール)にとらわれていると。他方で、ケース・スタディとしての歴史をOpen-endedにしておくことは、これこそが推論の誤謬性を回避し、情報を伝達するという科学としての役割を担うというわけである。「<<ひとの政治>>に破綻した彼(アーモンド 報告者註)が、当然のことながら、<<ひとの歴史>>にも立ちすくんでいることを認めないわけにはいかない」(内山秀夫、アーモンド1982年「あとがき」)。

もちろん、以上の暫定的な結論は、ハーシュマンがいうところの「認識の諸スタイル(cognitive styles)」に立脚するものである。

(了)

【引用文献】

* Almond, Gabriel A., (1969) "Determinency-Choice, Stability-change: Some thoughts on a Contemporary Polemic in Political Theory" in *Government and Opposition*, 5-10.

* (1990) *A Discipline Divided: Schools and Sects in Political Science*. Newbury Park, CA:

²¹ 「組み合わせ」以外の方法として、例えば、Simmons 1994のように「Separate Tables」を意図的に設けるというような方法もあり得るだろう。

²² 結論部で、「政治的安定と変化の原因と条件についてのより良い理論を歴史的経験に貢献する」(p.321.)ものである一方、「研究の目的は説明的なものである」(p.641.)とされている。

²³ もっとも、ミクロな観察によってパリントン=ムーアを「決定論的に過ぎる」(p.642.)とするのは、彼の「反実仮想的主張」(Smith 1983)を十分に踏まえていない批判といえる。

²⁴ John Womack, *Zapata and the Mexican Revolution* (1969) および James L. Payne *Patterns of Conflict in Colombia* (1969). このハーシュマンの主張は Almond 1990:14 でも紹介されている。

Sage

- * Scott C.Flanagan and Robert J. Mundt (1992) ”Crisis,Choice, and Change in Retrospect,”
In *Government and Opposition*,27-3.
- * Bates,Roberts H. et al, (1998) *The Analytic Narratives*.Cambridge:Cambridge University Press.
- * (2000) ”The Analytic Narratives Project” in *American Political Science Review*,September,
- * Barry,Brian (1977) “Review Article:’Crisis,Choice , and Change’,” Part 1/Part 2 ,*British Journal of Political Science*,vol.7 and 8.
- * Huntington,Samuel P.(1992),”How Countries Democracies” *Political Science Quarterly*,106-4.
- * Dorby,Michel(1986) *Sociologie des Crises Politiques*.Paris:Presses de la FNSP.
- * Hirshman,Albert.O.,(1970) “The Search for Paradigms as a Hindrance to Understanding,” in *World Politics*,22-3.
- * Jupille, Joseph; James A. Caporaso and Jeffrey T.Checkel,(2003) ”Integrating Institutions. Rationalism, Constructivism, and the Study of the European Union,” In *Comparative Political Studies*, 36-1/2
- * Laitin,David.D.,(2002) “Comparative Politics:The State of the Subdiscipline,” In Katznelson and Miler(eds.) *.Political Science.State of the Discipline*,New York:WW Norton and Co.
- * Orren,Karren and Stephan Skowronek (1995) ”Order and Time in Institutional Study:A Brief for the Historical Approach,” In James Farr et al.(eds.)*Political Science in History*,Cambridge:Cambridge University Press 1995
- * Peters,Guy,B. (1998) *Comparative politics:Theory and Method*.London:Macmillan
- * Pierson,Paul (2000) “ Not Just What , but When.Timing and Sequence in Political Processes.,” in *Studies in American Political Development*,14.
- * Pierson,Paul and Theda Skocpol (2002) “Historical Institutionalism in Contemporary Political Science” in Ira Katznelson and Helen V.Milner(eds.) *Political Science:State of Dicipline*,W.W Norton and Co.:New York
- * Scharpf,Fritz.W.,(1997) *Games Real Actors Play. Actor Centered Institutionalism in Policy Research*.Boulder:Westview Press.
- * Simmons,Beth.A.,(1994) *Who Adjusts?:Domestic Sources of Foreign Economic Policy During the Interwar Years*,Princeton:Princeton University Press.
- * Smith ,Dennis (1983), *Barrington Moore:Violence, Morality, and Political Change*,London:Macmillan
- * Weiner,Myron and Samuel P.Huntington(eds.) (1983) *Understanding political Development*.Boston:Little Brown
- * Zukerman, Alan.S., (1997) Reformulating Explanatory Standards and Advancing Theory in Comparative Politics,” In Mark Irving Lichbach and Zuckerman,*Comparative Politics:Rationality, Culture and Structure*.Cambridge:Camnbridge Univerty Press.
- * 網谷龍介 (2003 年) 「 比較政治学における 『理論』 間の対話と接合 小野耕二 『比較政治』 (東京大学出版会 , 2001 年) を手がかりに 」 『レヴァイアサン』 32 号
- * G.アーモンド (1982 年) 内山秀夫ほか訳 『現代政治学と歴史意識』、 劉草書房
- * ウェーバー、 M. (1994 年) 『社会科学の方法』、 祇園寺信彦ほか訳、 講談社
- * サイモン、 H (1987 年) 『システムの科学』、 稲葉・吉原訳、 パーソナル・メディア